

# 海外の方との交流をととした小学校外国語教育の実践

## ～既習内容を活用して思いを伝える子どもの姿をめざして～

中岡 正年

子どもにとって関係が深く、外国語で伝えることに必然性がある相手と交流することは、自分の気持ちや考えを表現することへの意識が高まり、語句や表現の理解が深まると考えた。実践中の子どもの行動観察や実践後のアンケート調査から、既習の外国語の表現などを積極的に活用しようとする子どもの姿がみられた。

キーワード：小学校外国語，探究，省察，しかけ

### 1. 研究内容・方法

本実践の単元を構成する際には、既習の内容を用いて子どもが自分の思いを海外の人に伝えられるようになりたくなるという姿を想定した。そのため、子どもが前学年で行った海外への募金活動と関連をもたせ、自分たちになじみ深い和歌山にルーツをもつ海外在住の方々には和歌山の魅力を伝えることにした。

この単元構想により、子どもは外国語を用いたコミュニケーションに必然性を感じることで、既習の知識や表現を活用して積極的に表現すると仮説を立てた。

さらに、カリキュラム・デザインにより、他教科・他領域との連携を行い多くの時間を子どもがこの活動について思いを募らせ、多角的に考えられるようにした。また、子どもが楽しさを感じながら外国語のインプット・アウトプットを行えるようにゲーム性をもたせて授業の導入として継続的に行った。このように場面に応じて「しかけ」を講じることで子どもが自分の目標を実現させるためにどうすべきかを考え、実践を繰り返すことで、自己調整場面も生まれると考えた。以上のことを考えて、単元の計画は次のように設定した（図1）。

実践の評価方法は、主に子どもの成果物や変容を観察することとした。実践中に子どもが作成した成果物をファイリングし、タブレット端末で用いて活動したことや表現を記録したものをポートフォリオとして残した。それらから得られた情報を比較・分析することで学習前と学習後の語彙の量や表現の変化をもって評価を行うことにした。また、実践後子どもに選択式の回答を設けた質問と自由記述から構成するアンケート調査も行い、本実践の成果と課題を明らかにすることにした。

#### 単元計画（全12時間）

第1時 県人会の方との交流を振り返り、自分達の学校生活を伝えることを確認する。

（主）

第2時 世界の子どもたちの学校生活についておおよその理解をし、自分達の学校生活を伝えるために必要な表現の確認を行う。（主）

第3時 世界の子どもたちの学校生活についておおよその理解をし、自分達の学校生活を伝えるために必要な表現の確認を探す。（主）

第4時 「相手によく伝わるように」することを意識しながら、修学旅行の思い出についてたずねあう。（知・技）

第5時 自分達の思い出を伝えることを意識しながら、学校行事や楽しんだことについてたずねあう。（知）

第6時 「県人会の方との交流動画」を作成するための伝える内容を考える。（主）

第7時 「県人会の方との交流動画」を作成することを考え、伝える内容を発表し合う。（知・技）

第8時 「県人会の方との交流動画」を撮る。（主・知・技）

第9時 「県人会の方との交流動画」について、感想を伝えあう。（主）（知）

第10時 より良い「県人会の方との交流（動画）」をすることを考え、動画を改善する。（主）（知・技）

第11時 県人会の方と交流を行う。（主）（思）

図1 単元計画

## 2. 授業の実際

本校では、「主体」・「協働」・「活用」・「省察」の4つの姿が豊かに繰り返し現れるようになる状態がよりよい「探究」であると考えている。本実践においても、「探究」の姿を引き出すために以下のように「しかけ」を講じた。

「主体」の姿を引き出すための「しかけ」としては、子どもが行った活動をもとに実践を行うことが主体的に活動することにつながると考えた。本実践は、子どもが5年生のときに行ったある国への募金活動に端を発する。その活動から、実践時の6年生の時にはある国の大使館や和歌山にルーツをもつ海外在住の方との交流へと学習に広がりをもたせた。自分たちから始まった活動であることや外国語である英語を使う必然性がある相手との交流は主体的に外国語を活用しようとする気持ちを引き出すことになると考えた。

「協働」の姿を引き出すためのしかけとしては、普段の学習からペア学習やグループ活動を取り入れポイントゲームやインタビュー・タイムを行うことで、表現や語句の確認を楽しみながら確認できるようにした。その際には「Why?」や「Me too!」などを使い相手の言葉に反応することで互いに話題を広げさせるようにした。また、日々の取り組みとして、継続して教師と子ども、子ども同士で「small talk」を行い、教師や友達とのやりとりから既習の内容をもとに自分たちのことを伝えるために活かすことができる表現や語句の模索や活用について考えさせた。日々の取り組みから海外の方との交流へ向けて相手によく伝わるようにするにはどうすればよいだろうかと思わせ続けた。

「活用」の姿を引き出すためのしかけとして、テキストの例文を「Basic sentence pattern」とし、掲示したり、子どもと確認したりしながら、伝えたい内容を作成させた。単元をとおして、既習内容から、自身の思いを伝えることができる気づきや経験を積み重ねることで既習内容を用いて思いを伝えることができたという成功体験を増やした。

「省察」の姿を引き出すためのしかけは、前述の3つの姿から、主体的に活動を行いながら友だちとの交流をとおして、既習内容を活用することで自分の思いを伝えることができることに気づかせることを考えた。

以上のような「しかけ」を講じる一方で、子どもは、自身の思いと表現できることの差に考えが揺らぐことも想定された。しかし、そのことが、課題を解決するために自身との対話や教師や友達と建設的な話し合いを行うことになり、伝える相手を意識した時の自分の活動や成果を俯瞰的にみることになると考えた。

このように「しかけ」を講じることによって、自身の伝えたいことと既習内容が結びつき、今までの学びの中から何が必然か、何ができるかの自己調整が行わ

れ相手によく伝わるように最適な表現を探究し続けることを期待して行った。

## 3. 授業の考察

それぞれのしかけは、実践の中で次のように効果を発揮したと考えている。

「主体」の姿を引き出すために、子どもの活動に端を発した実践を行い、また年間をとおして活動を行うことによって、コミュニケーションをとる相手、目的、状況が明確にすることができた。このことによって、子ども達の中で「外国語を使う必然性」が生まれ、既習の表現や単語を使って、思いを伝えようとする姿が頻繁にみられた。単元をとおして、相手意識をもって「話す」における「発表する」の目標を達成するために主体的に動画を撮影するなどして取り組んでいる様子がみられたと考えている（図2）。

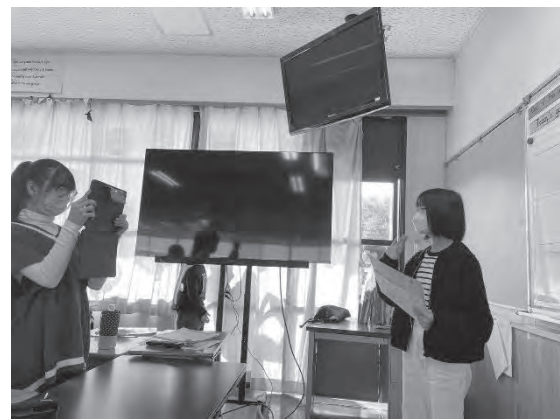


図2 海外の方に向けて交流動画を撮る様子

「活用」においても既習の内容と自分の伝えたい思いを結びつけ、単語を入れかえたり、本実践とは別の単元の例文や表現も活用したりし、既習の内容を活かして、自分の思い出を伝える姿がみられた。「活用」の姿をより活性化させるために講じた「しかけ」の中で特に効果的であったと考えられることは既習の内容を一覧できるように掲示したことと、「FLT」による支援であったと捉えている。本実践の子どもの姿から、今までの子どもの学習を可視化、また既習内容を一覧できるようにしたことにより、普段以上に自分の思いと伝えたい表現を結びつけている子どもの姿がみられたと考えている（図3）。



図3 互いに表現を確認したり表現の指導を受けたりする様子

またその際の活動において、以前から子どもの様子

をよく知っている FLT は子ども一人一人の個性や気もちをよく組み取っており、個人に応じたネイティブかつ自然な外国語の文例の作成に大変大きな貢献を果たしたと考えている。

「協働」においては特に、自分の思いを伝える発表者と発表を聞く評価者に分けて互いに思い出を伝え合わせることを「しかけ」として第7時において、活動を行った。このことによって、発表者が自分の思いを他者にしっかりと聞いてもらい評価される時間が確保され、発表することの大切なポイントを押さえながら活動を行うことができることを期待していた (図4)。



図4 発表者と評価者に分かれて活動を行う場面

しかし、クラスを半分に分け評価者となった子どもには、評価シートを渡していたが、評価シートを書くのに、時間がかかってしまい、発表者が次の友達に発表するまで待たなければいけなかったという意見があったので、改善していきたいと考えている (図5)。

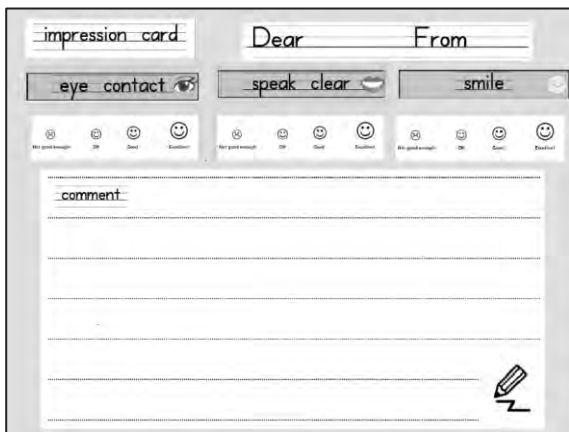


図5 子どもが用いた評価シート

「省察」においては、児童観察と子どもが毎時間行っている「ふり返し」からその成果を確認することができた。子どもは、毎時間の授業や単元をとおして、既習の内容や相手に伝えることを意識しながら、より良く自分の思いを伝えようとしている場面をみることができた。また動画を撮る場面でも、自分の発表している様子や友達の発表している様子を比べる中で、さらにより良いものにしていきたいと探究している姿も

あった (図6)。

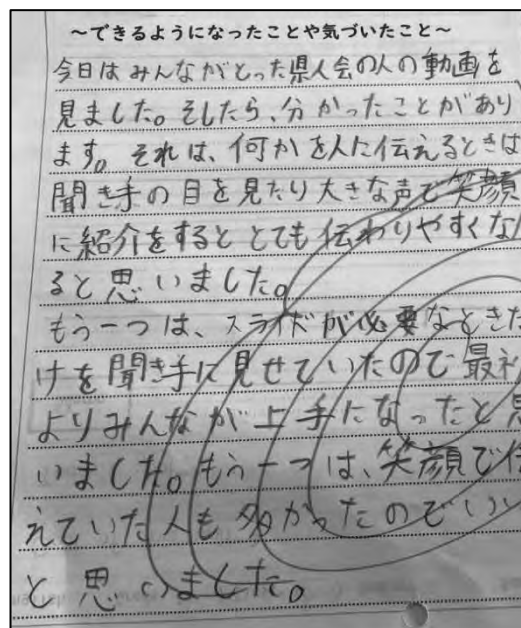


図6 子どものふり返し

全 12 時間の実践後、子どもにアンケート調査を行った。アンケートの項目は 17 項目であり、主に子どもが外国語や本実践に対してどのように感じているかを確認できるものとした。知識や技能の確認のためのテストではないため、アンケートの結果は子どもの主観に関わると思うところが多いと思われる。しかし、子どもがどのように感じているかは、本校の「探究」に大きく関わってくるところであるため、本実践の効果を探るためにも有効であると考えている。例として「外国語の授業に役立ちましたか。」の質問に対して子ども達は、89%以上が「役立った」と答えている。(図7)。

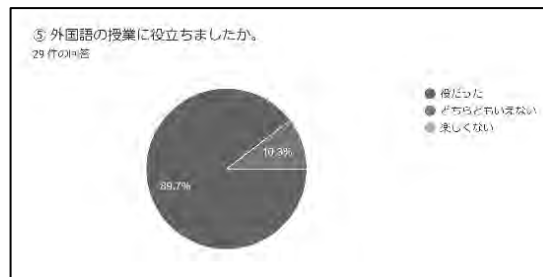


図7 「外部の方との交流は外国語の授業に役立ちましたか。」の問いに対する回答結果

「外部の方との交流は外国語の授業に役立ちましたか。」の質問に対して、29人中26人が「役に立った」と答えている。子どもがそのように選択した主な理由は「あまり外国の方と喋らないから」「日常生活で外国語を使うことが少ないから」と外国語を活用する必然性に関するものが多くみられた。海外の方に自分の思いを伝えるために子どもは既習の知識や表現から活用できるものはないかと考えることで、既習のことを思い

返し、伝える文章を考え、表情や声の大きさなども考えて動画作りを行う等、意識的なインプットとアウトプットを行っている場面を多くみることができた。この一連の活動によって、子どもが主体的に外国語の表現の習得や意欲的な活動をしていたことにもつながったと考えられる。

さらに「2学期までの英単語や文章を読めますか。」の質問に対しては、86.2%の児童が「読める」と回答している(図8)。「2学期までの英単語や文章を使って発表ができますか」の質問に対しては55.2%が「できる」と回答している(図9)。どちらもクラスの半数以上が達成感をもっていることがわかる。

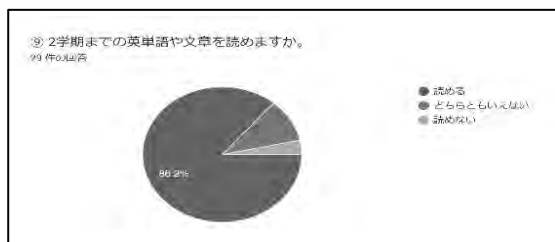


図8 「2学期までの英単語や文章を読めますか。」の問いに対する回答結果

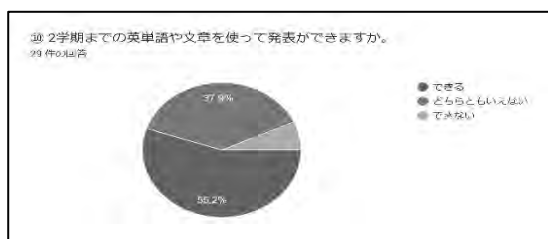


図9 「2学期までの英単語や文章を使って発表ができますか」の問いに対する回答結果

さらに興味深いのが「外部の方との交流は外国語の授業の特に何役立ちましたか。」の回答結果である(図10)。「聞く」が41.4%「話す」が37.9%と高い結果であった一方で本実践の授業目標の「発表する」は17.2%と低かった。

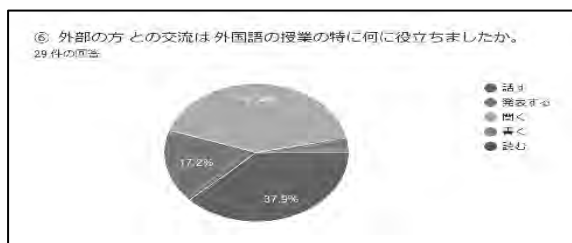


図10 「外部の方との交流は外国語の授業の特に何役立ちましたか。」

この結果は実際に人とコミュニケーションをとることで相手の思いをしっかりと聞きたいという思いが表れたこと、また自分の思いをしっかりと伝えたいということが結果として表れたのではないかと考えている。

また、発表するために原稿を作成したので、付随して「書く」力もついていると実践者は感じているが、子どもは実際に対人でコミュニケーションをとることに意識が向いていることがわかった。

#### 4. 成果と課題

本実践をとおして、子どもが自分の活動から実践を広め、外国語である英語を使う必然性がある活動とコミュニケーションをとりたいと感じられる相手との活動を関連させることは、子どもの意欲の向上に影響を与えることができることがわかった(図11)。またアンケート調査や授業後のふり返しシートなどによると他教科や他領域との連携を行いたいと感じている子どもの姿もみえてきた。さらに実践をとおして伝えたい内容を明確にすることで子どもが積極的に外国語を活用したいと感じるために効果的に作用するという見解が得られたとも考えている。

一方、子どもの見解として意欲の向上が本実践における「知識・技能」の向上にも効果が得られたと感じていることもわかった。

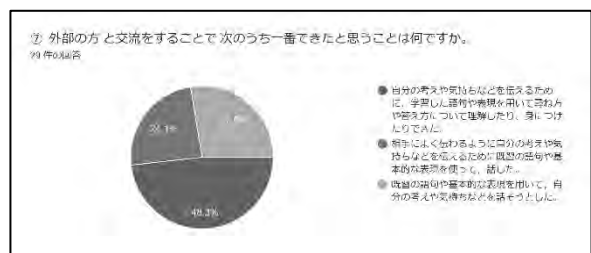


図11 「外部の方と交流することで、次のうち一番できると思うことは何ですか。」

今後も、学習者である子どもが単元のゴールの姿を明確にし、より実際の場をイメージできるような単元の設定や教具の工夫を行い研究、実践をしたいと考えている。さらに外部の方との交流は子どもにとって、意欲の向上に良い影響を与えただけではなく、本校が掲げる「探究」における「活用」において十分な成果をあげることができる「しかけ」であったと考えている。同時に、子どもは外部との交流を楽しみ、次回も望んでいることが多いことが分かっている。一方で、今回のように外国語を使う必然性の単元の設定を行うことが最大の課題でもあり困難なことであると考えている。

#### 参考文献

・仲川 浩世 (2015)「授業観察記録を基礎として 小学校における外国語活動展開事例の検討」 研究論集